

II 特別シリーズII

※現在、さくらサイエンスプランは新型コロナウイルスの感染防止のため、今年度のプログラムの実施を延期しています。

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第229回

宮城大学の活動報告



曾根洋明
(宮城大学
基盤教育群准教授)

東南アジアにもフォーカス

本学は、宮城県が設立団体となり「公立大学法人 宮城大学」を設立し、同法人が設置・運営する大学である。このため、宮城県と方向性を合わせ、宮城県および日本の発展のための方針を熟思し、グローバルコミュニケーションのメンバーとして本県・本地域が貢献すべき分野においての寄与を常に摸索している。日本企業の指向性はアジア、特に東南アジアにシフトしつつある。近年、本学は「グローバル基本方針」を整備し、宮城県と連動し、東南アジアにフォーカスした施策を打ち出している。



岩井教授(中央)、蒔田准教授(右端)とキングモンクット大学関係者

プログラム	
1日目	成田空港到着 仙台移動 オリエンテーション
2日目	食産業学講義 蔵王酒造訪問 蔵王酪農センター訪問
3日目	食産業学講義 キングモンクット工科大学との 協働活動に向けた討議
4日目	白松がモナカ本舗訪問 文化体験
5日目	仙台空港発帰国

KMUTTからの招聘にあたって

KMUTTとは2010年に協定を締結し、以後、教員が国際学会の際に同大学を訪問するなどして意見交換等を行ってきた。しかし、「相互」交流は実現できておらず、互いが有するポテンシャルを生かしきれない状況が続いていた。

招聘申請の以前から、まず最も成果が挙げられる交流分野をしっかりと特定することが必要と考えられていた。タイでは海産物などでも食されるが、これまでは多くが海岸部のみの消費であった。しかし、食の多様化の影響で内陸部でも海産物への需要が高まり、海から奥地へどのように保存輸送するかが課題となっていた。このため、KMUTTに古くからある微生物学教室と本学の食産業学群の交流にスポットをあてるのが適当と思われる。即座に筆者がタイに飛び同大学の国際交流センターと協議。微生物学教室のシニアメンバールのトゥイテンワONG教授と具体案の構築を行った。

また、採択が決定した際には、それを最大限に活用するために、招聘する学生の学修研究内容を事前に精査し、本学において同様の分野及び発展の可能性のある研究を行っている教員の中から、以前に海外留学及び海外勤務経験のある教員を中心に選抜を行い、英語にて講義が行えるようにした。



菟田准教授^⑤による講義で議論するTuitemwong教授 岩井教授から講義を受けるキングモンクット大学学生



キングモンクット大及び宮城大関係教職員らが教育研究活動の将来に向けて討議 講義中に発表するキングモンクット大学学生

夢は広がる
今回来日した2名の学生については、本学の大学および大学院への留学の希望が示された。今回の採択により、より深い学修や研究のための本学への留学、研究交流、就職等を目的とした再来日の可能性が十分に高まったものと考えている。また、本学においても、海外からの留学生に対する教授法が更に深化し、ノウハウが蓄積されたものと認識している。参加した来日学生が帰国後、他学生に対して波及効果をもたらしてくれることを願って止まない。彼ら自身のみならず、周りの学生も日本の大学や専門機関で研究してインターナショナルコミュニケーションへ寄与する成果を上げてくれるようになって欲しい。また、本学においては欧米だけでなくアジア地域に目を向け、更に俯瞰的に世界を見るものが出来るようになった関係者が多い。同大学とは今後交流を続ける予定で、今後は本学からの長期派遣も視野に入れて計画を立てていきたい。今後もさくらサイエンスプランを十分に活用させていただきながら、より一層のグローバル化に努めていきたい。

数えきれない成果

トウイテンワONG教授からは「タイにおいては食の種類も多様化し、より付加価値の高い高級食材が消費されるようになってきている。輸入品に頼らずに、地域の自然や特色を活かした地元産品の高付加価値化が課題となっている」と伺った。このため、先述の微生物学に加えて、本学からは、我が国食産業、フードシステムズ、食品開発学に関する講義のほか、未利用生物資源に関する講義、植物生理学、分子生物学に関する講義、食品衛生管理、HACCPに関する講義を提供。また討議の時間も多く持つようにした。

終了時のアンケートには、専門分野についての新しい知識が得られただけでなく、日本においては指導教員とその学生が家庭のような環境のなかで教えるユニークな研究方法を垣間見ることができ、有意義だったと書かれていた。学生たちの目はキラキラしていた。教授からは帰国後の彼らが楽しみだ、と耳打ちされた。

また、K M U T Tおよび本学の教員が、将

来に向けた討議を行い、共同研究の可能性、互いの学生の国際インターンシップ、デュアル・ジョイントディグリーの可能性などメールや教時間の訪問では議論が難しい内容まで踏み込むことができた。成田の出会いから仙台空港での見送りまで多くの時間をともにすること、今後の協働教育研究活動の方向性をより強固にすることができたことは大きな成果である。

さらに、本学が共同研究やインターンシップ、卒業生の就職先として関連性の深い3社を訪問することで、本学が地域と連携して研究活動を行っている実践例についても見学することができた。酒造会社においてはタイでは学ぶことができない日本酒の製造法、またそれに関連する微生物学を、乳製品製造工場においてはヨーグルトの発酵に関する知識を学んだ。最後に訪れた和菓子メーカーでは水分活性と保存性にまつわる話に大変興味をもち質問を何度も行っていた。これらの会社訪問には本学の食産業学類で学ぶ学生を帯同させた。K M U T Tの学生は同じ食の研究・学習をしている同年代の友を作ることができたことである。